

日本近海の絶滅のおそれのあるサメ

アブラツノザメ(北西太平洋亜種)

IUCN レッドリストより抜粋・翻訳

学名 : *Squalus acanthias* (北西太平洋亜種)

英名 : Cape Shark, Piked Dogfish, Spurdog

レッドリストのカテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) A2bd+4bd Ver 3.1

評価年 : 2006

レッドリスト掲載の理由 :

アブラツノザメは温暖な大陸棚の海底に棲む小型のサメで世界的に分布する。群れのほとんどは回遊性が高いが、この種に関して地域的な漁業管理は行われていない。管理はごく一部の国々や広い回遊域のなかの一部に限られている。

生息数は豊富ではあるが、この種は成長が遅く、繁殖力が低く、しかも寿命が長い(25-40年)ことなどから、増加率が極めて低く、このため過剰捕獲のダメージを受けやすい。ふだん分離している群れが集まるという習性のため、深刻な個体数減少のなかでもとりわけ成魚のメス(通常懐胎している)の捕獲の危険が高くなる。この群れが集まる習性は群れ単位当たりの漁獲量(catch per unit effort, CPUE)が、群れの状態の指標として不適當であることを意味する。つまり、生息数そのものは涸渇に近くなっても群れに対する高いCPUEは維持できることになるのである。

ツノザメ漁については100年余り以前から記録がある。漁業資源に関するいくつかの調査報告によれば、漁獲が事実上野放しである北東太平洋では全生息数のベースラインの95%が減少している。また、地中海と黒海でも管理はされておらず、黒海では1981年-1992年の推定調査で60%が減少と報告されている。北西大西洋では、メスの成魚の75%がわずか10年のあいだに減ってしまった。これは、混獲率の高さ、カナダ水域で続いている搾取、北米の大西洋沿岸各州が科学当局の勧告を無視するといった要因が、資源管理を行おうとするアメリカ政府の努力を阻害する結果である。

また、欧州での需要も世界の市場をあおり続けている。このほか、漁業と生息数の増減の傾向を示すデータによると、北東太平洋南部で過剰捕獲による減少がみられるが、アラスカでは落ち着いているようである。北西太平洋の状況がわかる唯一のデータは日本のもので、ここでは1952年-65年に水揚げが80%まで落ちており、さらに近海での単位当たり漁獲量(CPUE)は1970年代半ばから1990年代後半までに80~90%減っている。

南米は(欧州ではこの地域からの輸入が報告されている)、(spiny dogfish 漁)の規制がなくむしろ拡張しつつあるのと混獲とによって、ここでも生息数減少の報告がある。ニュージーランドは、同種の漁と混獲を捕獲量割り当て制によって管理している。オーストラリアおよび南アフリカは、漁獲のほとんどが廃棄されるため、漁業圧はごく限られている。

生息数の動向 : 減少

NPO 法人 野生生物保全論研究会(JWCS)

TEL/FAX : 03-5425-6323 URL:<http://www.jwcs.org>

